

東京学芸大学教育学部
初等教育教員養成課程
《ものづくり教育選修》
2010年度から
はじまります！(予定)

ものづくり de 教育

Vol.7 June.2009

Topics..

- 子どもたちに与えるチカラ
- 課外レポート「親子造形WS」
- ものづくり教育 Keyword
- ものづくりをつなぐモノ



「ものづくり教育」で子どもたちに与えるチカラ

前回「ものづくり教育」に接していく学生に備わるチカラについて図にまとめましたが、今回はさらに子どもたちに与えるチカラについて考えていきます。子どもたちの周りにはいろいろな大人がいて、さまざまな影響を与られます。子どもたちの身の回りの環境を整えてあげられるチカラも先生には必要だと考えられます。(新名)

初等教育教員養成課程では、「各教科に関する科目」として、誰もが小中学校で習ってきた知識をもう一度授業で学びます。しかし、ただ復習するだけではありません。過去に習った時との大きな違いは、何を目的に学んでいるかということです。例えばオームの法則を習う場合、ただ知識として学ぶ時と、教えるために学ぶ時とは目的が異なり、学ぶべき要素も変わってきます。この目的の意識化は教員養成課程の全員に大切なことと言えますが、とくにものづくり教育では重要視します。「教えるため」に加えて「各教科とどうつなげて考えられるか」も並行して考慮できるように、まずは学生自身が学ぶチカラを身につけます。ものづくり教育では、実感に基づく学ぶ力と実行力を育てる取り組みをします。

様々な角度からの
知識や体験



作ることやコミュニケーションの喜び・実感

備ったチカラを
子どもたちへ

ものづくり
de
教育



教科間をつなぐ力は実際の現場に立ったときに、人と人をつなぐ力、ひいては子どもの周辺の環境を整える大事な力になっていきます。



推進メンバー課外レポート：「親子造形ワークショップ」造形能力を育てる活動から、造形行為で育てる活動へ 石井壽郎

今回は石井先生の「親子造形ワークショップ」という活動を取り上げます。美術・教育・子どもに携わってきた石井先生は Art の可能性を考え、学内外で活動を展開しています。その中から先生がキーワードとして考える「環境としての大人」を子どもたちのまわりの大人に実感してもらう活動紹介して頂きました。

今回紹介する『大画面描画』では、基本的に子どもも大人も同様に実行していきます。最初に「丸をいくつかのかな」、次に「生まれてから一番長い線を引いてみよう」、そして「たくさん丸と線の中から動物を探してみよう」と投げかけ展開されていきます。場の状況によっては「その動物を森に返してあげよう」と付け足す場合もありますが、基本的に参加者への言葉での投げかけはその程度に止めます。そのかわり言葉ではなく、10m×10mの紙とクレヨン・ボスカなどの描画材・用具で環境を整え、環境での投げかけをあらかじめしておきます。最後まで決して「絵を描きましょう」とは言いません。

大画面の無数の線から動物を「見立て」描き込みをはじめた頃に、子どもと一緒に実行していた大人達だけを集めます。そして、子どもの表現進化から人間の発達過程などの子どもの表現理解の為のレクチャーを行ない、造形表現を基にしたコミュニケーションの手掛かりを渡します。レクチャーが終わり、子ども達のもとに戻ると読み込むべき造形言語が溢れ、造形コミュニケーションの為の空間が広がっているのです。



▲「クレヨンで旅しよう」ワークショップ
レクチャー終了後の描画を基にした親子の会話



▲上：「色と泳ごう」ワークショップ
下：「新聞紙とあそぼう」ワークショップ

2000年よりはじめられたこの活動は、大学をはじめ地域の文化センターやアートイベント、美術館などで、およそ3歳から12歳くらいの子どもの保護者を対象に行なわれ、現在も継続しています。親子で造形活動という一見子どもに向けての造形指導と思われるのですが、実は子どもは勿論、傍らにいる大人側に向けて行なわれている活動です。

子どもは立てない頃から周りのモノを口に持っていき、手で触る、などの興味本位の探索行動をはじめ、その延長で2～3歳頃から描画など何らかの造形行為をはじめます。後に言語を中心とした生活になっていくのですが、言語中心になった後でも造形表現は言語以上にその本人が持つ内面的情報を含んでいます。それは造形言語ともよべる事象で、自ら作った造形にはそれを築いた本人がおおいに現れています。表現全体が成長の痕跡であり、内面の軌跡なのです。そんな視線を前提としてこの活動は計画され、造形表現を子どもが自らする学びの成果として捉え、コミュニケーションの材料としていかし、大人側のより深い子ども理解を促進しています。そして、自発的な表現の保証を勧める事を目的にしていて、造形行為を芸術表現として学習する事を目的にしていません。

子ども達は、呼吸をする様に自然に絵を描いたり、モノを作ったりしはじめる。私達大人は、そんな簡単な事を何故か忘れてしまっている。どうして、彼らは習いませずにそんな事をするのだろうか？(石井)

ものづくり教育
Key word

No.006

好奇心 【名】よみ：コウキシン

◎ものづくり教育選修のために掲げたカギとなる言葉。「先生」に必要なチカラとして位置付けている。
[意味]①対象となるモノ、コト、バナなどに、興味や関心をもって、わくわくする心。②あくなき探求を支える心。ただし、この心だけでは何も始まらない。この心に「行動力」が加わると進歩、展開につながる可能性を持つ。
③割り切れないとき、割り切って考えたくないときに、プレーキとなっている心。たとえば、白黒ははっきりさせることより、その中間色のグレー（灰色）の魅力を探求するような心。④割り切れないものを好む心。この場合、好奇心の「奇」は奇数、割り切れないものを表象すると考えると理解しやすい。

この言葉は、恩師であるリズムスト：有賀誠門氏の教えてもらった解釈をベースにしています。「割り切れないこと」は、割り切らずに粘り強く探求する力につながる「好奇心」がもとにあるというポジティブな解釈でした。私の活動を支えている大切な言葉の一つです。（鉄矢）

Column: 「ものづくり教育」という言葉

田中喜美



◎「ものづくりをつなぐモノ」では、ものづくり教育と日常をつなぐきっかけのモノをメンバーそれぞれの独自の視点でご紹介していきます。

「ものづくり」なる用語が、今日のように世間のいろいろな場面で使われるようになったのは、それほど前からではないように思う。それは、バブル経済崩壊後の「失われた10年」のなかで日常用語の一つとなり、コンピュータとそのネットワークが広く浸透するにつれて、よく聞くようになってきたように感じる。しかも、『ものづくりが日本を救う』（服部光朗ほか編、日本工業新聞社、1999年）といった、やや偏りのある文脈においてである。

ましてや、「ものづくり教育」なる用語が、世間で市民権を得たものになっているかは、はなはだ疑わしい。少なくとも、「ものづくり教育」がきちんと定義され、それが教育界である程度の合意に達しているという状況ではまったくない。

反面、バーチャルな接面だけが異様に拡大し続けている現代生活の歪みとの中で生活する人間への影響をちょっとまともに考えるならば、子どもたちが、外界におけるリアルなモノとりわけ自然に対し、人との協働のもとに、自らがたてた目的にそってそれを変化させ、その過程で自らの自然をもまた変化・解放していくような場づくりが学校教育、とくにその初期の段階において大切になるであろうことは理解に難くないと思う。この対象的活動に基づく教育実践とそうした場を豊かに作りだせる教員養成の実践によって「ものづくり教育」の実体をつくりだす

ことと相互に関わらせながら、「ものづくり教育」の言葉を教育用語として確定していくという姿勢が、現局面では大事になっていると思う。

私たちは、この間に訪問した外国の大学や小・中学校の教員に、我々の意図を伝えながら、「小学校教員養成課程ものづくり教育選修」を英語でどのように表現したらよいかと質問し協議し合ってきた。相談したすべての教員たちから「とてもよいプランであり、成果を期待している。」等と励まされるなかで、結論として、Art and Technology Based Teacher Education for Elementary School と表現するに至った。短絡することなく、ふところを深くしてじっくりと取り組もうという意味が示唆された、よい表現だと思う。

同時に、近代の日本学校教育史は、美術と技術の教育は水と油であり、混じり合うことはなかったことを教えている。この事実の重さは忘れてはならない。だが、Art も Technology も語系が異なるだけで、その原意は共に「自然にはない人工物を生み出す技」ということであり、世界的には、アーツ・アンド・クラフツ運動やバウハウス等々、両者をつないだ豊かな営みは多くある。要は、常に子どもを中心に据えて、相互につながり意思と柔軟な構想力をもって取り組めば、結果は必ず後から付いてくると確信している。

◎ オープンキャンパスのご案内 ◎

2009年7月18日!!

ものづくり教育 GP からのお知らせです。本プロジェクトが学科の開設に向けて本格的に動き始めました。

来年度平成 22 年 4 月からのスタートに向けて、今年度中に選抜入試を行うことになる予定です。実際にものづくり教育選修としての授業が始まったら、どんなことを学べるのか？どんなカリキュラムなのか？どんな先生方に教わることができるのか？さまざまな疑問に 5 人のメンバーがお答えします。さらに、実際にどんなことができるのかを体験できる「場づくり体験」の計画も進行中ですので、興味を持った方はぜひキャンパスまで足を運んでみてください。このニュースレターではお伝えしきれない、生の声、生の活動をお届けします。

● 東京学芸大学オープンキャンパス 2009年7月18日（土） 9：30～16：00 会場：〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

※時間、内容等の詳細は大学 HP にてご確認ください。http://www.u-gakugei.ac.jp/index.html

お待ちしております！

本報は、文部科学省の認定する「質の高い大学教育推進プログラム」を受け、『小学校教員養成のためのものづくり教育開発』活動報告も兼ねて情報をお伝えします。

国立大学法人 東京学芸大学 田中喜美 山田一美 坂口謙一 鉄矢悦朗 石井壽郎

ものづくり教育研究 Vol.7
発行：東京学芸大学 A 類ものづくり教育選修（予定）
Tel&Fax: 042-329-7658 (田中研究室)
URL: http://www.u-gakugei.ac.jp/~monoedu
発行日 2009/6/19 編集 専任研究員 新名佐和子